



博物館実習およびサテライト・ミュージアム実施報告

菊地, 真

(Citation)

海事博物館研究年報, 50:47-52

(Issue Date)

2023-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482214>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482214>



博物館実習およびサテライト・ミュージアム実施報告

海事博物館専門員 人文学研究科准教授 菊 地 真

1. 学芸員資格のための授業

a) 展示見学

2022年度の海事博物館は、感染対策を取りつつ通常開館を行ったため、学内外を問わず、見学を何度か受入れ実施した。甲南大学からは、実践地域学や博物館展示論・教育論の一部として見学の来館があり、特に博物館学の授業では、展示の手法、パネルや文字なども工夫してどのように資料の持つ情報や魅力を来館者に伝えるか、普及活用の視点を交えて熱心に利用頂いた。

本学では、文学部で後期月曜日に開講の「博物館概論」（担当、橋本寛子）、「博物館教育論」（担当、坂江渉）、「博物館資料保存論」（担当、菊地）の3授業について、展示見学を実施した。大人数が密集するのを避けるため、授業ごとに3回に分けて実施した。実施日は11月28日（月）で見学者は合計43名である。例年企画展と常設展をあわせて見学し、授業内容に合わせていくつかの資料に焦点をあてて紹介している。今年は練習船深江丸がテーマのため、船舶ならではの資料として、船の誕生・命名の儀式である進水式の斧を取り上げた。当館には戦前から都合4代続いた深江丸のうち、深江丸（Ⅲ）世の進水式斧が保管されている。また深江丸もそうだが、商船は数十メートルを超える大きさであるため、船体そのものを博物館内に収納するのは基本的に不可能である。収蔵資料としては部品や積載器材のほか、模型や設計図面が全容を知るうえで重要な資料となる。深江丸や常設展示のさまざまな船舶模型から、近代以降の商船の特徴、模型収集の意義を学んで頂いた。ほか橋本先生に美術史の観点から、常設展の絵馬などについて解説頂いた。

なお昨年度に学生から感想で寄せられた声のうち、海事科学研究科で行っている船舶実習や研究航海の内容、船内の様子、船員の生活といった面は、「ありがとう深江丸」展という形で触れられた。

一方で、船舶の構造や、器機ならびに模型の丁寧な説明板の設置などは、十分に果たせておらず、引き続き課題としたい。学生たちの感想を、一部抜粋する。

「〔海事博物館の見学に）行く前は海や船のことをよく知らない自分でも楽しめるかと疑問だったが、鑑賞者の関心のどれかには必ずヒットする内容だと感じた。」

「港町である神戸において海に関する教育が非常に重要だと理解できた。」

「全体的に統一感がなかった。日本語と英語の併記が一部のみであったり、古い時代から現在へと進むのかと思えば、現在の海事については記述がほぼなかった。」

「絵馬や引札などの展示からは、船舶や航海がどのように認識されてきたのかを垣間見ることができ、異なった観点で興味深かった。」

「歴代の深江丸や航海の様子を撮影した写真パネルから、ストップウォッチや無線信号機など実際に使用されていた実物資料まで、なかなか見ることができない資料がたくさん展示されており、純粋に楽しかった。」

「可能であればテーマごとに展示する模型を決めて充実したキャプションをつけるとよりわかりやすい展示になるのではないかと感じた。」

「神戸大学を長年支えた船たちについて学ぶことができ大変有意義に感じた。」

「近代以前の船や道具についても模型や実物で展示解説されており、船そのものの進化や技術の向上も知ることができて楽しかった。」

菊地が担当する博物館資料保存論では、MLAKにおける資料保存の連携を講義しており、この一環で学内開催の他の展示も見学をしている。今年度は、「誓子と宙（そら）」（誓子・波津女俳句俳諧文庫、山口誓子記念館）、と「神戸大学120年—創立120周年記念—」（大学文書史料室）、「古典籍で

みる 鎖国下の漂流」(大学附属図書館)の企画展
見学を行った。

山口誓子の展示は星空を詠んだ俳句を集めており、夜の星のきらめきを表した十七文字の言葉を、星の写真などをバックに展示していたのが新鮮で

あった。大学文書史料室は大学の歴史を展示するため、毎年、どこにスポットを当てるかが工夫のしどころとなるが、今回は新型コロナに対する大学の対応の推移も展示されており、最新情勢をどう記録し提示するかというアーカイブズの姿勢が垣



図1 展示見学のようす



図2 「誓子と宙」展示・見学風景



図3 「神戸大学120年」展示・見学風景



図4 「古典籍でみる 鎖国下の漂流」展示風景

間見れた。大学附属図書館は漂流をテーマとしたが、同種の古典籍は海事博物館にも所蔵されており、当館と図書館の協力によって、さらに面白い展示が行える可能性が感じられた。

b) 博物館実習B：実務実習

海事博物館では2020年度から、神戸大学が行っている博物館実習のうち、博物館実習B（実務実習）と、博物館実習C（館園実習）について受け入れ協力している。

博物館実習Bは、理学部で中岡先生が4日間行っている実習について、前半2日間を海事博物館で実施し、指導を菊地が分担協力した。実習は2月22日（水）と24日（金）の2日間で行われ、収蔵庫の資料整理を行い、実務として資料整理の基礎を学んでもらう方針とした。まず初日に博物館の展示案内を行った後、収蔵庫の古典籍類について、目録を使って所在確認をし、データベースに必要なタイトルや法量等を調書にとりながら、中性紙の保存袋への再収納を行った。

期間中に、常設展示している船舶の花毛布の展示入れ替えにともない、毛布をさまざまな形に折り上げる様子を実演で見学させて頂く機会も得た。

理学部は最後の館園実習も科学館や水族館など、理工系が中心となり、受講生たちの関心も理工系寄りである。海事博物館は模型や器機類など工学的な資料も多いが、調査や収蔵時に求められる基礎的な技能は共通しており、博物館の資料の取り扱い方法の一端を学んで頂けたと考えている。

c) 博物館実習C：館園実習

今年度も3名の実習生を受け入れた。今回は文学部から2名、他大学から1名であった。期間は2月3日（金）～2月14日（火）の間の計1週間とした。実習内容は昨年度にならい、学内機関等3か所に協力頂き、博物館の日常業務を一通り経験できるようにした。

山口誓子記念館は、山口誓子が住んだ日本家屋の旧宅を再現した展示施設である。この山口誓子記念館の開閉作業を行ったほか、誓子・波津女俳

表 2022年度海事博物館：博物館実習C日程

1日目	海事博物館	施設、活動概要の説明。展示替準備。
2日目	文書史料室	収蔵資料の受け入れ、整理作業
3日目	文書史料室	収蔵資料の受け入れ、整理作業
4日目	山口誓子記念館	記念館開・閉館作業、施設・収蔵庫の見学と資料取扱い
5日目	海事博物館	展示の作成、入れ替え作業、展示解説
6日目	文学部	被災資料の修復作業
7日目	文学部	被災資料の修復作業



図5 実習B・Cの様子（資料整理、大学文書の受入れ、古文書の修復作業）



図6 実習の様子（展示入れ替えと解説）

句俳諧文庫の収蔵庫を案内頂いて、木製の特別収蔵室における資料保管の状況を学んだ。職員の米田恵子氏に指導いただいた。

大学文書史料室は、アーカイブズとして大学各部署から送られてきた書類を整理している。今回は戦後の事務書類やファイルのクリーニング、文書のホチキスなどの取り換えや修復作業に従事した。室長補佐の野呂理栄子氏に指導いただいた。

また被災歴史資料の救出作業について、地域連携推進室の松下正和氏に指導いただいた。最近古文書などが水害で水損する例も多いため、長年蓄積されてきた歴史資料の保存修復技術を学んでもらった。資料の吸水乾燥方法、水損史料の修復記録・洗浄・風乾・漉詰め（すきばめ）作業、真空凍結乾燥器による乾燥作業、などである。

海事博物館では新収蔵資料や企画展関係の展示入れ替えを予定していたため、その作業を実習で行った。企画展「ありがとう深江丸」では、深江丸が2022年3月に引退し、大学を離れるまでの最後の様子を、矢野元館長から提供いただいた写真を使い、パネル展示を作製した。あわせて新収蔵資料として、辰馬・新日本汽船の商船の進水式斧と木槌が一括寄贈されたため、支綱切断斧と進水式について紹介するミニ展示を作製した。

2. サテライト・ミュージアムの活動

a) 巡回展

MLAK 連携の事業として例年、サテライト・ミュージアムを実施している。2022年度は全ての施設で通常の展示が開催された。

誓子・波津女俳句俳諧文庫と山口誓子記念館は、特別展「誓子と宙（そら）」を9月12日（月）～10月21日（金）に、大学文書史料室は企画展「神戸大学120年—創立120周年記念—」を10月27日（木）～11月18日（金）に開催した。巡回展は海事博物館で11月30日（水）～12月19日（月）に開催した。ほかに東京オフィスと社会科学系図書館でも巡回展を開催している。文書史料室の展示は大学の歴史を軸としているため、海事博物館の進徳丸、深江丸といった教育関係の展示内容とリンクする点も多く、毎回巡回展が、海事の展示を膨らませてくれている。

海事博物館としても、巡回展を12月1日（木）～2023年2月3日（金）に百年記念館で開催した。百年記念館の展示ホールはこの時期、山口誓子の常設展と、大学史の常設展が展開され、文学・教育史・海事の3種類の展示があわせて楽しめる形となっている。今回は建造時の深江丸（Ⅲ）世の実験用模型を展示した。37メートルの大きさで航



図7 リーフレット（左からサテライトミュージアム、大学文書史料室、山口誓子、大学附属図書館）



図8 巡回展のようす（百年記念館）

海実習に従事した深江丸のおよそ20分の1模型は、ほどよく迫力があり、訪れた来館者の関心を引いていた。水槽実験で長らく使用されたため美しい模型ではないが、大学で船体模型を使った各種実験・実習を行っていることの紹介もあわせ、興味深く見学頂いたようである。なお引き続き、社会科学系図書館にて4月に巡回展を実施する予定であ

る。

b) 図書テーマ展示との連携およびその他の展示

ここ数年、展示会場に近い人文科学図書館や海事科学分館において、展示期間に併せて関連する図書を紹介している。海事科学分館では2022年10月―12月に「神戸／神戸大学ゆかりの図書」で大



図9 図書テーマ展示（山口誓子、大学史関係）



図10 社会科学系図書館での阪神・淡路大震災資料展示



図11 人文科学系図書館におけるテーマ展示



学史の図書などを紹介した。人文科学図書館では、それぞれの展示に合わせた図書テーマ展示を行った。9月から10月は「誓子と宙」展に合わせ、『山口誓子を知る：その生涯と俳句』といった近刊の図書や、星や天文学に関係する図書を、11月には「神戸大学120年－創立120周年記念－」展に合わせ、神戸大学関連の出版物と文学部・人文学研究科の教員の著作物などを、12月から1月には「ありがとう深江丸」巡回展にあわせ、「海に親しむ」と題して海に関わる本を集めて紹介した。選書は図書館職員の協力を頂き、菊地もリストアップをした。山口誓子の図書紹介では、海事博物館所蔵の天球儀を展示用に貸し出した。

社会科学系図書館では毎年1月17日にあわせ、大学附属図書館にある震災文庫を紹介し、阪神・淡路大震災について考える資料展を開催し続けている。今年度も2023年1月12日から31日まで、資料展「阪神・淡路大震災25年 あのとくとこれから」（2020年展示のリバイバル）を実施した。会場のモニターでは、震災文庫で2022年度から公開を始めた、兵庫県の地元テレビ局サンテレビジョンが制作した約20分の震災映像を上映した。

ほかに菊地の企画として、テーマ展示「読む・見る・歩く 神戸：三宮界隈」を人文科学図書館で開催した。これは文学部授業で学生が三宮や旧居留地周辺を調査し、特徴的な街の景観を写真と文章でまとめた成果をパネルで紹介すると共に、神戸に関する代表的な図書を展示したものである。また2023年2月から百年記念館において、

自然災害と防災に関するパネル展示を行っている。シリア・トルコで大地震が発生し、東日本大震災は12年となる。折に触れて過去の災害を思い返し、災害・災厄に対して私たちに出来る事などを考える機会になればと願っている。

引き続きコロナ禍であった。治療薬が無くワクチン接種に頼る状況で、新規感染者は2023年明けから漸次減少傾向も見せているものの、最初の緊急事態宣言時に比べれば高止まりしているし、病床はひっ迫しているなど、懸念がなおある。博物館としても covid-19が5類に移行された場合にどう対応するのか。体温計や消毒液を念のため備え、マスクの着用を励行し、少なくとも高齢の特別専門員（ボランティア）には勤務時間中のマスク着用をお願いするしかないであろうか。もどかしい日々が、まだ続く気がしている。

小生も海事博物館を手伝うようになってしばらく経ち、巡回展や学内 MLA 各機関との連携もようやく軌道に乗ってきた。ただし円滑な事業が行えるようになったとはいえ、「展示する」だけで留まっていたは進歩が無い。山口誓子や大学資料、船や海の魅力をどう伝えていくか、今一度考える必要がある。本年度もご協力頂いた関係各位に、心から御礼申し上げたい。

協力：一般社団法人海洋会、神戸大学附属図書館、大学文書史料室、山口誓子記念館、誓子・波津女俳句俳諧文庫、野邑理栄子、松下正和、米田恵子、田中史恵、井口琢人



図12 百年記念館における災害のパネル展示